こういうケースには**杏蘇飲**（『医宗金鑑』）の方がよいようです。［紫蘇葉三グラム、杏仁三グラム、前胡三グラム、枳実三グラム、陳皮三グラム、黄芩三グラム、桑白皮三グラム、貝母三グラム、麦門冬二グラム、炙甘草一グラム］を四日分処方しました。このとき、肺陰を滋す麦門冬は、量を少なめに配薬することも大事なポイントです。念のために、気管支拡張作用のある貼布テープも渡しておきましたが、幸いこの子には必要なかったようです。普段お茶を飲むような感じで煎じ薬を飲んでしまったそうで、四日分の処方で元気になりました。

子供は正直です。飲んでみて症状が楽になるのがわかると飲んでくれるのです。でも飲んでもちっとも効果がなければ、こんなまずいもの飲めるかと言わんばかりに、突き返されてしまいます。シビアな患者さんです。

2 喘息

九歳、男児

続いて、同じように咳込みながら九歳の男の子B君が入ってきました。前の子よりも苦しそうです。「昨晩からゼイゼイと咳込んで呼吸も苦しそうなんです」と、一緒に入って来たお母さんは、子供の背中をさすりながら心配そうです。細く痩せた男の子ですが、色黒で筋肉はややしまった感じです。少し肩呼吸をしていて聴診器をあてなくても喘鳴が聞こえます。鼻炎もあって耳鼻科にも通院しています。ときどき気管支喘息を起こしており、いつもは**小柴胡湯**エキス剤と**麻杏甘石湯**エキス剤を合方し、ひどいときにはテオフィリンや抗生物質も処方する子です。よく聞いてみると今回は一週間以上前から喘息症状が出ていて、通っている耳鼻科でもらった気管支拡張剤や抗生物質をすでに服用しているそうです。それにもかかわらず昨晩は症状がいっそうひどくなり、お母さんは今朝早くB君を連れて来ました。

B君には水っぽい鼻水も薄い痰もみられません。息を吐くときにはヒューヒュー、ゼイゼイと比較的乾いたような音がします。「熱哮喘」と考えてよいようです。［炙麻黄一・五グラム、杏仁四グラム、石膏十グラム、炙甘草三グラム、茶葉四グラム、柴胡四グラム、黄芩四グラム、貝母四グラム、魚腥草六グラム、生姜一・五グラム、紫蘇子三グラム、白僵蚕三グラム］を三日分処方しました。**五虎湯**の加減方です。麻黄と石膏の割合は一対五以上。特に子供の場合には一対十にすると安全に使えると教わっていたので、九歳ということから一対七くらいにしてみました。茶葉（緑茶）は清熱作用とともに麻黄の悪い作用を抑えてくれるので欠かせません。

三日後、「だいぶ楽になりました。夜もゼイゼイしないし、耳鼻科でいただいていた薬は必要ありませんでした。しばらく続けたいんですが」

その後三週間服用を続けたところ、びっくりするほどよくなり、男の子もニコニコしていました。しかし、気管支喘息の治療はそれほど甘くはありません。完治したかのように影をひそめていた病邪は、服薬を中止してから二十日ほど経つと、再びぼつぼつ出現してきました。しかしその後は**麻杏甘石湯**エキス剤を中心に、たまにテオフィリンを補助に使う程度ですんでいます。ステロイドの吸入を併用する段階でも、前回のような煎じ薬を処方する段階でもありません。

気管支喘息は難治性の疾患です。中医小児科の教科書（上海科学技術出版社）では、小児喘息の発作期を熱哮喘と寒哮喘に弁別しますが、いずれも内因といわれる肺気虚・脾気虚・腎気虚のために身体の

中に痰が伏し、この「伏痰」に外因としての熱邪や寒邪がからみついて発病するといわれています。治療は一筋縄ではいきません。標治だけではなくて、緩解期には、病気の本である気虚を治療し、伏痰が生じないように手を打たなければなりません。**玉屏風散**や**六君子湯**・**六味丸**などの出番も考える必要がありそうです。まだこの子と喘息との闘いは続きます。

3 冷え性、片頭痛、下腹部痛　三十七歳、女性

「C子さん」

次に呼ばれて入って来たのは、いつも笑顔で感じのよい三十七歳の女性でした。でもひどい冷え性と片頭痛に悩んでいました。ちょうど一年ほど前にこちらに転居して来て以来、当院で**呉茱萸湯**エキス剤を処方されるようになり、それまで毎日のように服用していた鎮痛剤から解放されたという方です。それでも顔色はあまりよい方ではありません。手足も冷たく、身体も細身で脈も細、舌も痩せています。

「先生、片頭痛の方は呉茱萸湯を飲んでいるせいか、とても調子がいいんですけど、一週間ほど前から左下腹部に重いような鈍いような痛みがあるんです。たまに下腹部も脹ってきますが、便通も普通で血便もありません。生理も正常です」

冷え性の彼女です。寒邪内阻による腹痛と考えて**暖肝煎**（『景岳全書』）［当帰六グラム、小茴香六グラム、桂皮四グラム、烏薬六グラム、木香四グラム、茯苓六グラム、生姜二グラム］四日分を処方しました。呉茱萸湯で片頭痛が軽快した彼女だから、と簡単に考えていました。

その四日後です。

「先生、じつはまだ痛いんです。食欲はあるんですけど、食後に胃のあたりまで少し痛くなってきて、ここ二〜三日は軟便です」

彼女の舌はいつものように辺縁が水滑でしたが、前回みられなかった薄い黄膩苔がみられました。腹診しても、圧痛も、はっきりした抵抗感もありません。「おかしいな。寒証だけじゃなくて、少し熱証もあるのかな」と、薄い黄膩苔をみて思わずつぶやいてしまいました。

今回処方したのは「痞証」で寒証と熱証が同時にみられるときに使われる**半夏瀉心湯**です。辛開苦降法の説明でよく引き合いに出される方剤です。［半夏六グラム、黄芩四グラム、乾姜四グラム、人参四グラム、炙甘草四グラム、黄連二グラム、延胡索四グラム、木香四グラム、生姜二グラム、大棗四グラム］を一週間分処方しました。胃痛や腹痛の緩和のために木香と延胡索も加えてみました。

一週間後、胃痛は消失していましたが左下腹部の鈍痛は相変わらずです。精密検査のために総合病院で腹部エコーや卵巣の検査などもしましたが問題はありません。その後も悪戦苦闘がしばらく続きました。軟便でも排便後すっきりしないというときには通因通用の意味で**調胃承気湯**や**大黄甘草湯**を使ったり、胃もたれがするといえば**六君子湯**を使ったり、とまるで節操がありませんでした。それでもまだ穏やかな季節のうちはなんとかなりましたが、寒い冬の季節に入ると左下腹部の痛みは増してきました。

「一日中というわけではないんですけど、寒い日は少し痛みが強くなるみたい。便も下痢っぽくなる